

# 聾の映画が奏でる無音の音楽

**日比野**：こんにちは、おひさしぶりです。今日はよろしくお願いたします。

**牧原**：お久しぶりです、お元気ですか？

**日比野**：元気ですよ、牧原さんはコロナでどういう生活を送っているの？

**牧原**：そうですね、とりあえずは大丈夫なんですけども、コロナの感染拡大でいろいろと生活や生き方が変わりました。コロナの関係で今までの仕事の仕方などが変わって、自分に助けがないんだということもあり、また同じような生活をしてきたということもあって、自分や食生活、働き方だったり、そういうものを見つめなおしたということがあります。おかげで9キロ痩せたということもあります。去年も一度痩せたんですけども、やっぱり人間の生き方だったり、考え方だったり、芸術だけではなく生活などすべてに影響があったんだと思います。

**日比野**：私も痩せました。私が痩せた原因はしっかりわかっているんですけども、夜のお酒を含めた食事や集まりがなくなりまして、お酒の量が減ったから痩せたかなと。

**牧原**：そうですね、なので、感覚が研ぎ澄まされてきたという感じですね。

**日比野**：あと、たとえば今日は手話通訳が入っていますが、ろう者にとって口元というのは一つのコミュニケーションの手段だと思うんですね。それがマスクによって口元や表情が見づらいというのは、かなり難しいところがありますよね。

**牧原**：そうですね。おっしゃる通り、やはりマスクを外していただかないと分かりにくいんですね。日本語を引用するというよりも、手話の場合には、口で話しながらだったら、日本語の口の形を見ながらできるんですが…たとえばこれは「終わる」という手話なのですが（手のひらを上に向け、下に引きながら指先をすぼませる）「終わる」という手話を出すときには口をパ、と開くんですね。それで、これが完了形か過去形かということがわかるんです。口形で判断するので、そういう意味でも分かりにくくなります。ただ、ろう者同士だったら慣れているので、口形がなくても目の表情だけで何を言いたいのか分かるんですけども、やはりマスクをしているときには相手の言いたいことを想像し、考えながらやるんですね。以前はそういうことがなかったと思うんですけども、

マスクをしなくてはならないという風になってから、自分もそういう生活に合わせて進化したなと思います。

やはり、人間は想定外のことが起きてしまったら諦めるのではなくて、その場で対応して様々に進化していけるんだと思っています。ろう者だけではなく、聴者もそうだと思います。

**日比野：**そうですね。まずはじゃあ、牧原さんの紹介もかねて、代表作品の映画の紹介をお願いいたします。

**牧原：**そうですね、簡単に紹介します。この映画は、2016年に私だけではなく、もう一人のろう者の雫境（DAKEI）さんと一緒に共同制作をしました。ろう者の音楽があるのか、という問いから始まっているドキュメンタリーの映画になっています。聴者たちから誤解されることがよくあるんですけども、無音の音楽という意味がちょっと違うんですよと。これは無音の映画なんですけども、聴者から見ると、音がない無音の音楽ってこれなのか？というふうに言われてしまうんですけども、私の言いたいのは音楽がないというわけではなくて…私たちは音が聞こえないことが当たり前なので、音という感覚がないわけですね。私たちの言語である手話を使って、手話の世界で音はどうなるのか。手話の中にある非言語や身体性を探っていく感じで、音楽って何？を色々なろう者に表していただいた、というのが『LISTEN』の映画になります。それで、これは答えのあるものではありません。見てくださった方たちが、ろう者の音楽というのがこういうことなんじゃないかと考えていただきたい、というような映画になっています。

**日比野：**はい、ではその『LISTEN』の映画予告を見て頂ければと思います。

**牧原：**準備の間に少しお話してもいいですか？ 実際にこの映画を見てくださった聴者たちに、耳栓をして見てもらっていたんですそこで、皆さんから言われたことでなるほどなと思ったことがあります。私たちが耳栓を配った目的というのは、聞こえる人はやはり耳に頼り、映画館で映画を見てもやっぱり音が気になってしまうので、それを防ぐために耳栓をお配りしたんです。で、皆さんから言われたのは、逆にうるさくて大変だったという人が多かったんです。理由を尋ねると「自分の心臓の音が聞こえた」とか「耳栓が我慢できなくなってしまった」など、そういう意見をいただいたんです。だから、意外に聞こえないということができないんだな、聴者は聴者であることから逃げられないんだなという新しい発見をした、というのがこの映画での体験です。

**日比野:** 今『LISTEN』はどこかで公開したりとかレンタルしてたりとかするんですって？

**牧原:** 今はDVDはまだ作っていません。DVDを作らないのは、画面が小さいとちょっとよくなくて、やはり大きな画面で見たいですね。感じ方もそれによって異なってくるので、大きな画面で見たいということもあり、DVDを出していません。ただ、今コロナのこともあって自主上映なんかもできない状況なので、はじめはオンラインで上映をしたこともあります。そろそろDVDだったり、オンラインで見たいということも考えたいと思っています。ただ本当は大きな画面で見たいですね。

**日比野:** はい、では予告編の『LISTEN』が準備できたようなので、ご覧ください。

(『LISTEN』 予告編映像が流れる)

**牧原:** ありがとうございます。

**日比野:** 彼ら・彼女たちの中に、僕たち聴者が言う「音」ではない音が、身体の中に感じている・身体の外に感じているというのが、映像から伝わってきたと思います。牧原さんの言葉の中で、いわゆる「聴者」と「ろう者」という言い方があって、音で聞いたリレコード盤に針を落として音楽を聴いたりという聴文化と同じように、それとは違う世界で、ろう者のろう文化があり、その中にろう者が聞こえている・感じている音楽がある、ということ以前お話されていたと思うんですが、ろう文化というものについてお話していただけますでしょうか。

**牧原:** はい、そうですね。聴者から見ると、ろう文化ってなんだろと思われると思うんですけども、ろう文化というのは簡単に言うと、手話を第一言語として生きてきたろう者のコミュニティで生まれてきた文化です。今までろう者は障がい者という見方がされてきましたが、手話は聴者たちが使っている音声と同じ位置にある言語なんです。前まではそれはちょっと劣るものだというふうに見られてきたんですけども、ろう者たちがそれは違う、対等だと訴えてきて、今は音声言語と同様な言語だということになっています。

たとえば、聴者たちが日本人として日本語を話し、最後の方に結果を話すというのが日本語の文法であるとするよね。日本手話の場合には結果を先に言う文法というのがあります。なので、そういう意味でも言語としても違いがあります。日本語という言語、手話という言語、それぞれあるもの・ないものが違ったりするわけです。

やはり言語と文化というのは密接に関わっているものですから、私たちは、ろう文化と



いうものを持っている、というわけなんです。私の場合には親もろう者ですので、小さい頃からろう文化は当たり前で育ってきました。それでも、親が聞こえて子供が聞こえないという家庭が90%の日本の中で、ろう文化を知らないろう者もたくさんいます。大学に進んで同じろう者に会って、こういうろう文化があるんだと目覚める人もいます。大きくなってから手話を覚えて、ろうコミュニティに入ってくる人たちもいます。これが自分たちろう者のアイデンティティだというふうに、大きくなってから変わる方たちもたくさんいます。

**日比野：**手話の文化というのは音声の言語とは全く違っていて、僕も時々手話の人たちとシンポジウムでお会いしたり、電車の中で手話をしている人たちと会ったりすることがあります。音声だと例えば5～6人いて5～6人が同時に喋ると何言ってるかよくわからなくなるんだけど、手話の場合だと視覚的なものだから、5～6人が視野に入っていると、なんとなくそれぞれが何を伝えようとしているかが混ざらず伝わってくる。だから、10人いて10人が手話をして、視覚に入っていれば、きっとあの人はこういうことを言っているんだなとわかると思うんだよね。でもこれが音声だと「わからないから一人ずつ言ってよ」という言い方になっちゃうと思うんだけど、手話ってそうじゃないよね。同時にやっても視覚的だからわかるのかなと。だから、全く違う種類の音声にはない特徴があるコミュニケーションの手段だなと感じています。

**牧原：**そうですね、手話の場合には例えば「結婚します」というのはこういう手話をするんですけど（左親指と右手小指を立てて、左右外側から内側に近づけ、真ん中でくっつける）、音声の場合には「けっこん」といいますよね。手話ではこのように、男と女を示す手をくっつけるんですね。男性同士でも女性同士でもこのようにして使えるわけです。で、同時にそのことをいっしょに表せるんです。そういうような特徴があります。遠くにいても伝えられるとか、そういった違いもあると思います。音声の場合には伝えられなくても、手話だったら遠くでも大丈夫、とか。

**日比野：**はい、今、牧原さんから手話についての話をしてもらいましたが、きっと同じように視覚的な障がいを持つ方の中の世界観・文化、あらゆる機能が障がいをもっているからといって、健常者…何をもって健常者かというのものもあるんですけども、いわゆる無いから困っているということではなくて。さっき牧原さんが最初に言われたような、そこから始まって工夫していて自分で開発していく、ということによって新しい文化とか価値観とかが生まれてくるんだなと。人との違いとか、無いから自分で創造して新たな世界を築いていこうとするところに、アートとか芸術の役割がすごくあるのかなと思います。

**牧原：**そうですね、やはり障がいという言い方が合うのかわからないのですが、見えにくい人・聞こえない人という世界、マイノリティの立場ですよ。マジョリティではなくマイノリティの立ち場、聞こえる人たちはマジョリティです。その力関係みたいなものがどこにでも同じようにあると思うんです。例えば男女でもそういう力関係があると思うんです。最近では現代アートを学んだりとかするんですけど、いつも思うのがマイノリティとマジョリティの関係ですね。自分が見たときに、アートというのがマジョリティとマイノリティの繋がりを表しているものが多いな、と思うんです。自分が育ってきた環境・背景を出しているもの、たとえば聴者たちが出しているアートの中には様々なものがあるということがわかります。私たちがろう者はマイノリティですので、聴者はマジョリティになるんですけども、マジョリティの中にもマイノリティ・マジョリティの関係があるんだということが見えてくる。そういうものがあるんだ、と思いました。結局みなさんの根本には同じような力関係だったりなどがあるんだな、というのが思ってきたことです。

**日比野：**はい、そうですね。だから、マジョリティ・マイノリティっていうものをもっともっと細分化していくと、地球上の一人一人の違いというものになっていくと思うんですけども、一人一人の違いというものを尊重しあえて魅力だと捉えられることが、一番大切かなって思っております。

**牧原：**そうですね、おっしゃる通りです。なぜかというと、ろう者の世界もやはりいろいろな人たちがいて、聴者から見ると手話で会話しているというふうに見えると思うんですが、実は単に手話というわけではなくて、もっと日本手話というものになるとマイノリティになりますし、人工内耳を装着している方たちもいるわけですね。そのほうが、聴者の方の世界のような生き方が合うという方たちもいるんです。そういう聴者の世界に近づくことがいかにどうかということもありますけども、やはり皆さん今オンラインでこういう技術が進歩してきた中で、ある意味すごく助かる部分はあると思うんですが、逆に消えてしまうものもあると思うんですね。それと同じように、私たちが本当にこれでいいのか・これがいいのか、と悩むところではあると思います。子どもたちに手話を覚えてもらいたいけども、人工内耳も許容するべきかという。聴者の基準に合わせてしまってもいいのかどうか、非常にナイーブな問題になっています。技術が進化している今、人間としての倫理観のようなものが問われ、改めて考え直す時代に来たのではないかなと思います。

**日比野：**牧原さんが言われたような、ろう者の方に人工内耳を入れて聞こえる世界に行



くことがいいのかどうかということを改めて聞くと、聞こえることがいいでしょうと思  
い込んでいた人たちにとっては、そういうことなんだと気づかされる言葉だと思います。  
知らないで済んでいることってたくさんあるんですけども、それぞれの自分の世界観・  
価値観があるんだと知ることが大切だと思います。

**牧原：**本当にそうですね。逆に私も、こういう言語の世界があるんだということ、こう  
いう方たちがいるんだということに、いろいろと教えてもらうことがあります。また単  
にそれぞれの性格だったりなどもあると思うので、そういう意味では多様性だとみんな  
言うんですけども、じゃあ実際に多様性の意味が本当にわかっているのかどうか、とい  
うことを皆さんに問いたいなと思います。例えば、盲人たちのことについては私は知ら  
ないんです。実際に盲人にエレベーターなどで会った時、私はどうしたらいいかわから  
ないので、きっと引いてしまうと思うんですね。私は話しかけることもできませんし、  
どういうふうにしたらいいのかとなってしまうんです。これで本当にいいのだろうか  
と自分に対して問いかけることもあります。そういったように、障がいがあるから助け  
合える、分かり合えるというわけでもないということ。やはり、考え方も様々な人た  
ちがいるんだということ、無意識的に抑圧したりされたりすることもあるんだ、とい  
うことも思いました。それに自覚的であるかどうか、というのが多様性に結びついていく  
んじゃないかなって思いました。

**日比野：**はい、ありがとうございました。時間も少なくなってきたんですけども、今後  
の牧原さんの『LISTEN』に次ぐ、映画やなにか表現の発表の予定はありますか？

**牧原：**今いくつか作っている途中のものがありまして、まだ発表はしていないんですけ  
ども、それとはまた別に、東京藝術大学美術学部で准教授をされている荒木さんと一緒  
に、3年前からろう者と現代アートを結び付けるようなワークショップを開催していて、  
私も一部お手伝いさせていただいています。今年もこれについてやる予定です。聴者と  
ろう者の対談だったりとか、ろう者だけを集めて美術館などに行って、アートや芸術を  
鑑賞して意見を話し合う経験を皆さんにさせていただけるようなワークショップなどを企  
画しています。まだ発表されていないんですけども、もし発表されるようになりまし  
たらぜひご参加いただきたいなと思います。

**日比野：**そうですね、荒木夏美先生のキュレーションで、藝大陳列館での展覧会が9月  
にありますね。楽しみにしております。